特集 私なりの里海論・里海感・里海的取組

“里海の世界”と漁村の暮らし

大 浦 佳 代

海と漁の体験研究所

“The Satoumi-world” and life in fishing communities

KAYO OURA

Umi to Ryo no Taiken-kenkyujo (Free writer), Suginami, Tokyo 167-0034, Japan

私の里海の定義：「食糧生産＝産業をベースに，生活文化やコミュニティすなわち“漁村の暮らし”すべてを根底で支える自然システム」

1. 里海とコミュニティ

研究者でも実践者でもない筆者が寄稿するにあたり，乏しい見聞にもとづく雑感を“話題提供”として記すことをお許しいただきたい。その上で本稿では，里海の世界を“漁村の暮らし”にまで少し広げて考えてみたい。

まず，宮城県旧歌津町の保護区（禁漁区）と集落のコミュニティについて紹介する。地先の磯に“禁漁区”を設け，資源保護をしつつアワビなどの水揚げを集落のために使う例は各地に散見されるが，歌津町では江戸時代初期から連綿と続く「契約会」という“結”に近い独特の互助組織が13の浜（集落）のすべてに残り，保護区を共有財産として管理運営している。

もともと歌津の保護区はアワビの繁殖条件のいい磯に設定され，計画的に水揚げをして集落の自治費の一部に

あてられていた。やがて昭和50年代にアワビの種苗放流が始まると，集落ごとに漁港近くの構造物などに種苗を放流し，新たな保護区を設けたという。

浜によって保護区的环境が異なるため水揚げ高はまちまちだが，歌津半島の先端に位置する純漁村の泊浜地区（125戸600人）では，海水浴場整備で沈めた消波ブロックがアワビの優秀な保護区となり，年間600万円ほどの水揚げをもたらすようになった。

泊浜には自治会がなく，全戸が加入する契約会の総会と役員会が集落の自治にあたっている。ここは歌津町の中でも特に契約会の力が強い地区だが，優秀な保護区からの水揚げが契約会を核としたコミュニティの経済的基盤となっている。

泊浜の保護区からの水揚げの使い道が興味深い。自治諸経費のほかに「大事な海をなるべく汚さないよう」合併浄化槽の整備や，側溝の維持などを行っているのだ。35年も前に作られた契約会の規約に「環境保全に努めること」の一項があるのは人びとの海への思いの証だ。

写真1 消波ブロックの保護区
海水浴場の砂浜は巨大防潮堤で消える計画。

写真2 磯漁には木造船が最適
泊浜の船大工には，震災後8隻の新造注文があった。

さらに2006年、保護区の水揚げを30年間コツコツ貯蓄した6千万円で、宮城沖地震に備え150人収容の生活センターを新築する英断を下した。東日本大震災では、125戸の半分が津波で全壊したにもかかわらず、声のかけあいと日ごろの防災訓練の成果で、逃げ遅れの犠牲は1名にとどまった。被災後は、生活センターを拠点に契約会の采配で集落が結束し、凍えることも飢えることもなく避難生活を送ることができたという。

これは、里海が漁村のコミュニティ形成の基盤となっている特徴的な例ではないだろうか。歌津の里海は今も健全だが、磯焼けなどで資源が枯渇した地域では、集落のために使われるべき禁漁区を個々の漁業者に開放した例も耳にする。そうした地域では、コミュニティのあり方に変化がもたらされていることが想像される。

2. 里海の標としての地名

里海の利用に関して興味をひかれるのが“地名”だ。人びとが利用し身近に親しんできた浜や磯、サンゴ礁には細かく名前がつけられている。命名は認識そのものだ。地名にはその土地の人びとの自然の観察眼や、地域の歴史が込められていることも多い。地名は、里海の機能を測るひとつのバロメータといえるだろう。

福井県坂井市三国町で海女になって7年目の大井七世美氏は、海女の手で海が耕されてきたことを身をもって知ったという。大井氏は、海女の高齢化で利用される瀬（岩礁）が少なくなるにつれ、瀬の名前も忘れられていっていると語っている。地名の消失は産地の消失にほかならない。大井氏は海女になってから、瀬によって海藻の分布が異なり、海女が多種多様な海藻を識別して採取し細かな手仕事を加えて商品化してきたことに気づかされたという。同じ海藻でも瀬の深さや日当たりの方角によって、旬の時期や品質が微妙に異なるのだそうだ。瀬の名はそれを識別する標でもあったのではないだろう

か。

南の海に目を転じると、サンゴ礁にも細かい地名をつけて漁をしている人びとがいる。沖縄県宮古島の最北の狩俣集落には、素潜り追い込み漁の集団が残っている。かれらの主な漁場は島周辺のリーフや、島の北東に広がる広大なサンゴ礁「八重干瀬（やびじ）」だ。追い込み組の親方歴50年余の友利哲雄氏は、複雑に入り組んだリーフにつけられた200以上の地名を、正確な位置や特性とともに頭の中に入れていると語る。

狩俣の追い込み漁は、素潜りで海底に袋状の網を張り、両端につけた袖網と長さ300mのロープを泳ぎながら絞り込み、サンゴ礁の多種多様な魚を追い込む漁法だ。干満による潮の流れや水深、風向き、地形や季節など複雑な条件の組み合わせで、親方が網を入れる位置と方向を指示する。友利氏の話では、多くのリーフの情報を持っていないと安定した漁獲があげられないだけでなく、資源の枯渇をまねいてしまうという。優れた親方が率いる狩俣の追い込み組は、一度漁をした場所はしばらくの間休ませているのだ。

里山の人びとが、どこに何の樹があるか山菜がどこに出るかをよく知り、採りつくすことなく上手に利用しているのと同じく、人手を加えなくとも持続可能な利用がされている追い込み漁の漁場もまた、間違いなく“里海”と呼べるのではないだろうか。

瀬戸内海、岡山県日生町の浜にもほぼ10mごとに細かく地名がつけられている。古い台帳を開いてその話を聞かせてくれたのは、故・本田和土氏だ。日生には浅い海を漁場とする小型定置網の「つぼ（壺）網漁」がある。海の環境の変化に敏感なつぼ網漁を営んでいた本田氏は、30年も前にアマモ場の再生に先駆的に取り組んだことで知られている。

つぼ網漁は、最盛期には日生と周辺の島の沿岸をびっしり埋めつくすほどさかんだった。おのずと競争は激し

写真3 サンゴ礁の魚を狩る素潜り追い込み漁

写真4 日生のつぼ網
円錐状の袋網に藻場の魚介類が入る。

く、場所割は毎年くじ引きで行われた。網を張る位置は厳密に定められ、少しでも区画をはみ出すと組合に張り直しを命じられたという。

浜に細かい地名があったのは、区画の目印だったこともあるが、網干し場として利用されていたことが大きい。つば網の網は、付着物で汚れると漁獲が格段に落ちるため、こまめに張り替える必要がある。引き上げた網は浜に上げて干し、日がな一日浜に座り込んで掃除や補修を行った。当然、条件のいい浜は奪い合いになる。そこで、浜の場所も毎年くじ引きで決めたという。本田氏は、浜で網仕事をしつつ海を仔細に観察していたからこそ、環境の変化に気づいたと語っている。日生では、浜と海が一体となって里海の世界を形成してきたといえるだろう。

3. 里海の文化

食用ではない水産物の利用も、里海をめぐる文化として重要な意味がある。

温泉が少ない瀬戸内海沿岸には、海岸の洞窟を焚火で熱し、海水に浸した生のアマモを床に敷き詰める一種のサウナ風呂「石風呂」が数多く分布していた。現在、通年営業の石風呂は広島県竹原市忠海に1か所残るのみだが、毎年8月に1年分のアマモを刈り取り乾燥させたものが使われている。石風呂が減ったのは、惜しげもなく刈れるアマモ場が消滅したことが大きな要因だ。健全な里海は、豊かな生活文化の母でもあるのだ。

瀬戸内海ではアマモは畑の肥料としても貴重だった。アマモを入れた畑のミカンや芋類は甘みが強く、いい値がついたそう。さらに、急な斜面に耕地を切り開いた島々では、繊維が長く強いアマモは畑の土留めにも効果的だったと、お年寄りから聞かされた。

信仰や祭礼にかかわる資源も里海からもたらされてきた。アマモやホンダワラは、磯れをはらう神聖なものとして神社の神事に使われている。あるいは北九州市門司の和布刈（めかり）神社では旧暦元旦の深夜、社前の海でワカメを刈る神事が執り行われる。

また、自然の森羅万象を信仰してきた日本人は、岩や巨樹、湧水などを神として祀ってきたが、磯の特徴的な岩や岩礁も龍神様としてあがめるなど信仰の対象とされている。

浜に漂着する“寄り物”（漂着物）にも、日本人は神を見出してきた。エビスの起源は海に漂流する神であることはよく知られている。冒頭に紹介した歌津半島の先端には、周辺地域の信仰を集める“漁神様”の尾崎神社があるが、そのご神体は、昔々近くの浜に漂着した木像だと伝えられている。里海の世界は本来、生態系や自然環境だけでなく、浜の寄り物に“神なるもの”を見る精

写真5 漂着した像を祀ったら大漁したと伝えられる恵比寿（大分県臼杵市）

神世界にまで及ぶ、奥深く豊かなものなのだろう。

尾崎神社のご神体にはまだエピソードがある。白布に包まれ人目にさらされることがなかった神聖なご神体が、数年前に賽銭箱とともに盗難にあったのだ。泊浜契約会の役員は頭を悩ませ、ご神体のかわりに鳴子のこけしを買うことも考えたというが、結局、歌津の神事を司る神官の判断で、祈祷したお札を新たなご神体にすることで落着いたようだ。

「木像だからこけしで代用」という発想はよくわかるが、盗まれたご神体は海の向こうの異世界から漂着したからこそ神格を与えられたはずだ。プラスチックごみが散乱する現代の海岸では、寄り物に神を見る精神は薄れゆかざるを得ないのだろうか。

4. 里海のこれから

一方で、里海を伸立ちにした新しいコミュニティーや文化が生まれている。各地で市民が参加している海岸清掃や藻場・干潟の活動がそれだ。これらの活動では漁業者以外の人びとが、生産の場としてではなく“ふるさと”として海辺を身近に感じ、環境の保全に手をかけている。これは、今までにはなかった全く新しい“里海づくり”だといえる。

里海の世界は時代とともに形を変えつつある。古いものをただ懐古的に惜しむことに意味は見出せない。しかし、海辺の人びとが自らの生存をかけて蓄積してきた生産の技術、利用の知恵や生活文化は、里海を健全に保つために必要不可欠であり、海に対する畏怖や崇拝、憧憬が里海環境を守ってきたはずだ。その精神を理解し忘れることなく新たな里海づくりが行われることが、これからの時代に強く求められているように思う。